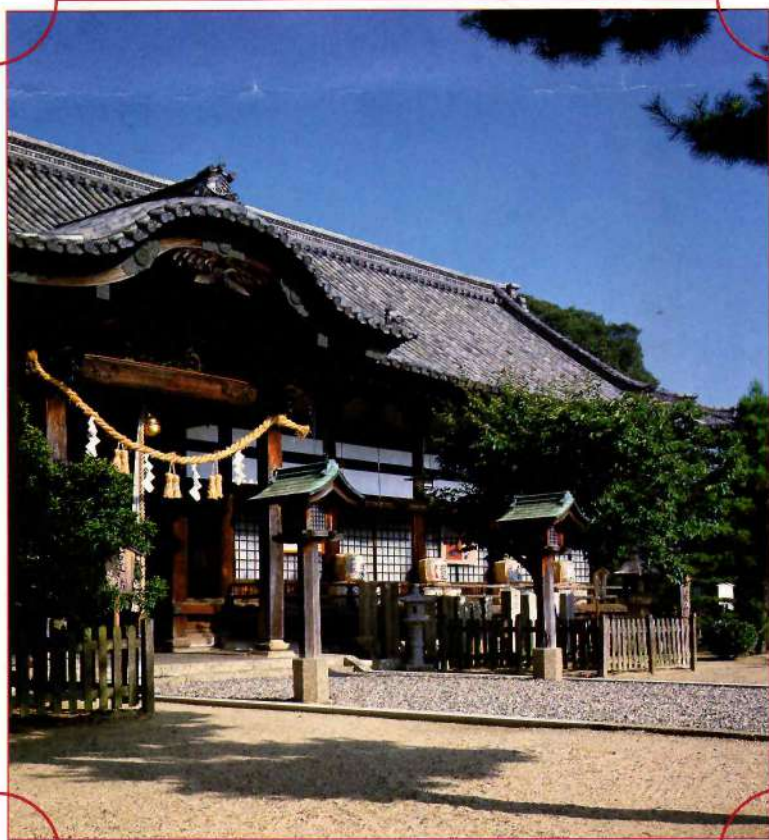


安産・厄除守護神
最古 譽田八幡宮



譽田八幡宮拝殿

●御 祭 神

菅田八幡宮は、^{こんだ}応神天皇、仲哀天皇、神功皇后を主祭神として、住吉大神、八后神を相殿に、併せお祭りしております。当宮は応神天皇の宗廟として朝野の尊崇がことに厚く、歴代天皇の行幸を仰ぐこと数次、また鎌倉時代以降の各時代將軍の厚い崇信と一般民衆の崇敬をうけてきました。

●安産の御神徳

古伝縁起によると、後冷泉天皇の永承六年のこと皇后が御懐妊されたとき、或る夜の夢に、南殿へ出られると、木の下に老翁が立っていてその姿はさながら鬼のごとくでした。

「安産を願ふなら吾を祭るべし」と告げると夢はさめ、そこで皇后はこの旨を天皇にお話になりました。

天皇の申されるには「木に鬼は即ち槐木(エンジュ)の木である。むかし神功皇后が菅田別皇子を御出産になったとき、槐木をもって産殿の柱を造らせた故事がある。これはきっと槐木をもって産屋を営むべしとの夢現であろう。」これらの神話によって知られるように、古来より当社の槐木は「安産木」として、出産の際に災難を除き、安産の守護として、広く一般に親しまれてきました。

●厄除の御神徳

応神天皇は商工業の祖神、学問芸術の親神として、古来より厄年の方に災厄を祓い、福を求める神として信仰されています。

厄除御祈禱は、厄年に当たる方の安全を一年間祈って行われます。

また二月節分当日には、厄除祈願祭として「御湯奉納神事」が午後九時より行われます。



菅田八幡宮全景

●応神王朝の成り立ち

応神天皇の諱は菅田別尊と呼ばれ、この「ほんだ」は河内の地名にちなんだものと推定されています。

現在の羽曳野市菅田には、世界でも屈指の大きさをもつ応神天皇陵があり、応神天皇は皇室系図である「帝紀」や宮廷物語である「旧辞」あるいは「古事記」「百済記」などによって記されているように、四世紀後半に実在した方です。

大和川、石川の流れる河内地方は、四世紀の後半に日本と朝鮮の緊張が高まるにつれて瀬戸内交通の重要性が加わり、一層開発が進みこの機に有力氏族らに支えられた応神天皇は河内地方を支配して、ここに新王朝を築きました。

●帰化人の渡来と大陸文化

応神王朝の頃、我が国の文化は大陸文化の導入によって急速に発展し、それは半島からの多くの帰化人によるところが極めて大きかったと考えられています。

この頃朝鮮半島は、北方に強大な高句麗、南方に統一国家を形成したばかりの百済と新羅の三国が対抗しており、360年代の終わりごろ日本はこれらの国々ともさまざまな形の交渉を行っていました。

その結果、百済、新羅、任那からの帰化人の渡来が盛んになり、これら帰化人によって新しく金銅製の馬具、武器武具や金銀製の装身具類が登場し、豪族

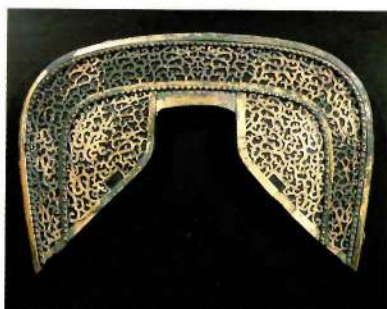
たちの身飾りはそれまでのものに比して、一段と華やかになりました。

とくに馬具の製作は、金工、木工、革工などあらゆる工芸技術を総合したもので、我が国の工芸技術の飛躍的進歩を示すものであります。



ほうじょうばし
放生橋

当宮境内より応神天皇陵に通じる参道にあり、太鼓形をなした石橋で、9月の大祭にはこの橋をみこしが渡御されます。



国宝 金銅透彫鞍金具 古墳時代

● 譽田八幡宮の縁起と信仰

当宮の縁起については「誉田宗廟縁起」に詳しく記されていますが、この縁起絵巻は足利義教が当宮へ参拝の際に旧い縁起を補遺して、新図をつくり奉納したものであります。



重要文化財 譽田宗廟縁起 室町時代

さて縁起は、まず応神天皇御陵の創草の記事からはじまります。天皇が崩御されたことを伝え聞いた人々は、鋤耒を荷って雲霞のように集って御陵を築いた。これが応神陵である。ところが或る日竜馬が現れて、その歩いた跡の跡をもって境界とした。次いで誉田八幡宮建立の由来にうつり、欽明天皇の勅願によって御陵前に社殿を建立し、八幡大菩薩を勧請した。そのとき天皇は参籠されたが、夜中に八幡大菩薩が出現し、奇瑞のことがあったので天皇はいよいよ深く信仰になり、この日、二月十五日を吉例とし、歴代天皇は一代に一度は誉田八幡宮に行幸すべきことを定められた。

続いて聖徳太子参籠のこと、弘法大師参籠のこと、行基の参籠、菅原道真の参籠など、創草期における霊現、奇特のことが綴られています。

そして記録的な記事にうつり、後冷泉院のとき社殿を南へ一丁ばかり移転し、新たに社殿を造営されたこと、永承六年十五日後冷泉院の行幸、治暦二年三月二十八日社殿が鳴動し光を発する異変があり、それ以来朝廷では御占の神事が行われることとなったことや、当宮ゆかりの神鳩の故事、社紋の巴紋について述べています。



重要文化財 舞楽面 還城楽鎌倉時代



重要文化財 舞楽面 陵王鎌倉時代

以上が縁起の詞書のあらましですが、おそらく八幡信仰がさかんになった結果、応神天皇ゆかりの地に社殿が建立されたと考えられます。11世紀になると、南河内で源氏によって武士団が結成され、1051年前九年の役に源頼義、義家父子は陸奥国に出兵しますが、これと同じ年に「縁起」には菅田社殿の移転改修(現在の位置)と後冷泉院の行幸のことを伝えています。

当時世間では神仏の習合という思想が発達して、神社にはさかんに神宮寺が建てられるようになり、菅田八幡宮にも護国寺という神宮寺が生まれました。

やがて源氏の氏神が八幡であるという信仰がひろまると、菅田八幡宮は將軍家をはじめ源氏を名のる武士たちの信仰をうけるようになりました。

すなわち源頼朝は建久七年社殿、伽藍を修復し国宝の神輿や神馬、重要文化財の松川菱螺鈿鏡鞍、同鉄蛭巻薙刀などを寄進し、室町幕府六代將軍足利義教は重要文化財「菅田宗廟縁起」、同「神功皇后縁起」を寄進したことは、この間の事情を如実に物語っています。



国宝 塵地螺鈿金銅装神輿 鎌倉時代

●近世の菅田八幡宮

中世が終わって天下統一を果たした豊臣秀吉は、菅田八幡宮に社領二百石を寄進しました。天正十四年(1586)に社殿、伽藍が焼失したため、文禄三年(1594年)社領二百石を志紀郡古室村に転換し、ついで秀頼も社殿再建に力をそえ、普請奉行に片桐且元を任命しました。

それは当宮に伝わる秀吉の朱印状、片桐且元の文書などで知ることができます。しかし拝殿の建造が、ちょうど大阪夏の陣の時に当たったために、建物の内部は未完成に終わっております。大阪落城の影響が当宮でもかなり大きなものであったことが伺われます。

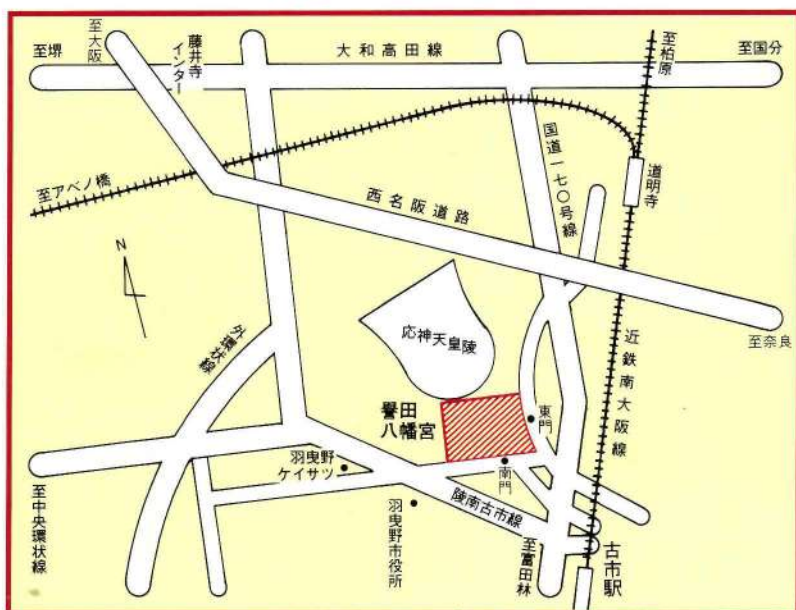
徳川幕府は、引き続き社領二百石を扶持し、また数次にわたって社殿の造営、修復を行っています。

このような幕府の厚い庇護のもとに、神宮寺として長野山護国寺を併存し、その塔頭十五坊伽藍がそびえ、社人十三家を擁して、その規模の壮大であったことは「菅田八幡宮古図」にもうかがわれます。しかしながら明治初年の神仏分離、廃仏棄釈により、長野山護国寺の大半は取こわれ、当時の遺構としては、今は南大門を残すのみであります。

〔譽田八幡宮年中行事〕

月	日	行事
1	元旦	歳旦祭
	2	安産祈願祭
	3	厄除交通安全祈願祭
	9	えびす祭
	15	とんど祭
2	節分当日	厄除祈願大祭 御湯奉納神事(午後9時)
4	1	姫待稻荷祭
5	8	夏祭(ふじ祭) 不事除祈願 舞楽・神楽奉納 包丁式奉納・武道奉納
9	14	秋季大祭宵宮祭
	15	秋季大祭 午後9時みこし渡御(応神天皇陵へ) 神楽奉納 献茶・献花奉納
11	1~30	七五三詣り
12	31	除夜祭 かがり火点火(午後11時)
毎月	1・15	月並祭(祈禱受付：毎日午前9時より午後4時迄)

〔譽田八幡宮略図〕



大阪府羽曳野市誉田三丁目2の8 ☎ (0729) 56-0635

※近鉄南大阪線古市駅下車 0.4km

〔譽田八幡宮歴史年表〕

●国宝 ○重要文化財 ○重要美術品

年 代	で き ご と	年 代	で き ご と
5 C	応神陵つくられる(恵我藻伏岡陵) 仁徳陵つくられる(百舌鳥耳原中陵) 倭の五王の活躍	5 C	●金銅透彫鞍金具
6 C おわり	四天王寺創建		
6 4 5	大化改新・都を難波の長柄豊碕宮に移す		
9 2 7	応神陵、陵墓として『延喜式』にのる		
1020	源頼信、南河内に定住 (河内源氏のはじめ)	1 2 C	法華経この頃書写
1051	前九年の役。譽田宗廟縁起に社殿の改修と後冷泉院の行幸を伝える	12C な かば以後	●塵地螺鈿金銅装神輿
1180～ 85	源平の争乱	1 2 C おわり	○松川菱螺鈿鏡鞍 ○鉄蛭巻薙刀
1 2 C おわり	源頼朝譽田八幡宮に神輿などを寄進	1 3 C はじめ	○太刀・銘則国
1 4 C	南北朝の動乱 このころ堺が商港・軍港として発展	1228	○舞楽面・散手・貴徳・納曾利
1433	足利義教譽田宗廟縁起・神功皇后縁起を寄進、この頃から譽田の舞楽さかえる	1279	○舞楽面・天童
1455	畠山合戦はじまる畠山義就譽田を本拠に京都の畠山政長と戦う	1284	○舞楽面・陵王
1570～ 80	本願寺織田信長と対戦	1 3 C おわり	○劔・銘真守
1583	豊臣秀吉大坂城築城開始	1294	○後撰和歌集(伏見天皇宸翰)
1594	秀吉大坂一帯で検地、秀吉社領200石を譽田八幡宮に寄進	1343	○舞楽面・退走徳
1600	関ヶ原の合戦	1 4 C なかば	○後光厳院消息
1606	豊臣秀頼譽田社殿を造営	1433	○譽田宗廟縁起 ○神功皇后縁起
1 7 C なかば	大橋龍慶重要文化財太刀等多数寄進	1498	○舞楽面・退走徳
1808	蒲生君平『山陵誌』2巻を著す	1583	豊臣秀吉朱印状ほか
1848	応神陵陪塚丸山古墳より国宝馬具など出土	1606	片桐且元書状
		1 7 C なかば	○靈元天皇宸翰



◀夏祭

譽田八幡宮では古くより舞楽が盛んにとり行われ、鎌倉時代から室町時代にかけての舞楽面(重要文化財)15面が残っており、毎年5月8日の夏祭に舞楽が奉納されています。



秋祭▶

毎年9月15日に行われる秋の例祭には、神輿が応神天皇陵へ渡御する神事が厳粛に行われます。

古くには、御陵の後円部頂上まで神輿が渡されましたが、現在では御陵の外堤までになっています。